

「かばんを持つのは子どもです」

ぶどうの会広報誌のアンケートで、「無人島になにを持っていく?」という楽しい質問をもらいました。おもしろがってへんな答えを書きましたが、なんと言っても無人島ではまず食べ物でしょう。食材を得ること、口に入れられるように整えること、食器……。次は安全。身体を傷つけないための着衣、眠っていても安心な場所、思わぬものに出会ったときの武器、そんなものが必要です。「無人島での暮らし方マニュアル」もないし、ケータイで人に訊くわけにもいきません。なにもかも自分で考え、工夫してやらねばならない、それが無人島暮らしです。

考えてみると、マニュアルがないのは無人島暮らしだけでない。人生そのものがマニュアルなどないものなのだと思います。人が出会う場面には、それぞれ違いがあって、まったく同一の場面は決してありません。よく似た場面に出会ったとしても、感じること、考えることは人それぞれみんな違います。同じ人物であっても、そのときによる違いがあるでしょう。その結果、とる行動は100人いれば100通りになるものです。無人島に置かれたときの行動の仕方は、人によってずいぶん違うことでしょう。それと同じように人生そのものも、一人ひとり違うものになるのだと思います。マニュアルがないということは、そういうことです。私たちはマニュアルのない人生を生きる力がほしいと思います。自分で考えて、判断して、やってみる力。子どもたちにもそのような力を蓄えてもらいたいと願います。

考えてみれば、赤ちゃんのころ子どもはオムツがぬれた、おなかがすいた、眠たいと、何もかもを泣いて訴えました。お母さんは子どもがしてほしいことを予測したり察知したりして、それをかなえてあげました。けれども、そのような「何もかもしてもらおう時代」は長くはありません。間もなく子どもが自分でできるようになり、やがてお母さんの手など必要としない年代になります。やってあげた時代である乳児期から、お母さんがやってあげたくてももう手が出せない少年期へと、数年間のうちに子どもは歩を進めるのです。

乳児から少年へと子どもが橋を渡って行く、それが今の幼児期です。その意味で言えば幼児期は中間期であり、橋の時代です。やってもらう人から自分でやれる人に向かって、子どもたちは脱皮していくのです。ここではお母さんの役割も変わります。それは子ども自身がする脱皮を促し、そのために支援する役割です。子どものためにやってあげる役割から、子どもが自分で出来るように手助けする役割に変わるのです。ここではお母さんも、やってあげる人からの脱皮が求められているのです。

やってあげることが親切であった時代、やってあげることが愛情であった時代は次第に遠ざかります。ここで問題がひとつ残っています。「出来るようにしてあげる」のは面倒なことだということです。出来るようにする手助けは、時間がかかります。それに待ってあげないといけな。励ましたりほめてあげたりもしなくてははいけない。おまけに多くの場合子どもとのバトルにも遭遇する。やってあげてしまうほうがズット楽なのです。だからついついかばんの中のものを何もかも入れてあげ、拳句はそのかばんを持ってあげることになる。こうして殿下のようにして登園してきた子どもたちは、かばんにコップが入っていないことに気づくと、「お母さんが入れなかった」と、侍従の失態にして平然としている。これはすこし情けない。

いっぺんにはいかなければ、お母さんも脱皮しましょう。これが西尾先生が展開している「かばんは子どもが持ちましょう」キャンペーンの真意です。